

紀要

土偶装飾付土器の根本的性質と展開過程.....	瀬口 眞司 (1)
栗太郡の白鳳寺院研究史	宮村 誠二 (19)
蜂屋遺跡出土軒瓦を考える	福井 知樹 (24)
天武朝期における野洲地域出土須恵器の法量分化について —西河原森ノ内遺跡北半包含層を中心として—	遠藤あゆむ (28)
中世成立期の民衆の思想と信仰 —塩津起請文と卒塔婆から—	濱 修 (37)
中世集落における巻数板のあり方について —考古資料の検討から—	木下 義信 (46)
将棋史研究ノート10-2 —日本における博打と将棋の関わり その2—	三宅 弘 (53)
滋賀県行政文書で見る「近江の考古学黎明期」	田井中洋介 (63)
未就学児と歴史系ワークショップについての予察 ...	鈴木 康二 (76)

33

土偶装飾付土器の根本的性質と展開過程

瀬口 眞 司

1. 序論

(1) 本稿の論点と対象

本稿の論点 本稿では、縄文中期のいわゆる土偶装飾付土器・土偶付土器の展開過程と根本的性質について問う。

筆者の研究テーマ1つは土偶の根本的性質の解明である。土偶の出土点数は数万点におよび、結果として、多様な造形を目の当たりにすることになる。その複雑さに私たちはしばしば当惑する。しかし一方で、混沌とした複雑な現象の中に、手を替え、品を換えつつ、繰り返し組み込まれた共通要素も見出すことができる。この点は重要である。というのも、根本に関わる要素だからこそ、繰り返し組み込まれていた可能性があるからだ。——筆者の研究の基盤は、この繰り返し現れる共通要素を混沌の中から何とか見出し、そのあり方に着目しながら、土偶の根本的性質の解明を試みていくところにある。

研究の実践として、筆者は3つの作業を行ってきた。Aは、いわゆる土偶装飾付土器を起点とした縄文中期の土偶の検討である（瀬口 2013 ほか）。Bは、土偶のそもそもの姿に着目した初期土偶の検討である（瀬口 2015・2018）。Cは、上記A・Bを総括する作業である（瀬口 2019）。

このうちBに関しては、型式学的な検討も併せて行い、時間的な位置づけ、変遷や系譜に関する認識をある程度深化できたと考えている。しかしAに関しては、型式学的な検討はまだ導入しておらず、その点で認識の深化は果たせていない。また、そのためにCに関しても検討の余地を生み出してしまっている。

そこで本稿では、Aの検討の起点となった縄文中期のいわゆる土偶装飾付土器・土偶付土器と呼ばれる資料の型式学的な検討を試み、併せてこれらの資料がもつ根本的性質の見直しに取り組むことにする。論点となるのは、「根本的性質に対する認識はどのように深まるのか」、結果として「時期的変化や流れはどのように整理できるのか」、といった2点である。

本稿の対象 本稿で扱う土偶装飾付土器・土偶付土器の類品としては、顔面把手付土器、人体装飾付土器、人面付土器、獣面把手付土器、獣面付土器と呼ばれるものがある。

このうち、土偶装飾付土器・土偶付土器とは、土器内側を向いた土偶を、土器外面に取りつけたものである。研究史上、土偶装飾付土器と土偶付土器は弁別して扱われることも多い。従来のその弁別基準は、土器口縁部と土偶の位置関係にある。土偶装飾付土器に分類されるものは、土器口縁部を境として、その上位に土偶頭部をあしらひ、下位に土偶胴部を表現するものである（図1-（1））。一方、土

偶付土器とは、土器口縁部を境として、その上位に土偶頭部から胴部上半までをあしらうものだ（図1-（2））。本稿でも上記の基準に従いながら取り扱うことにする。

なお、土偶の顔面だけが土器に取りつくものは顔面把手付土器と呼ばれている。本稿では必要に応じて対象とするが、具体的な検討は稿を改める。また、本文中では土偶装飾付土器と土偶付土器をひとまず弁別して取り扱うが、最終的には土偶装飾付土器からの一連の展開の中で両者を位置づけた。そこで、本稿表題には土偶装飾付土器だけを冠していることをあらかじめ断っておく。

以下、まずは本章次節において、土偶装飾付土器・土偶付土器に関する主要な先行研究を整理し、本稿で必要となる事前作業を洗い出してみたい。

(2) 主要な先行研究の成果

小野正文氏の成果 研究者達の認識に大きな影響を与えている主要な先行研究は3つある。小野正文氏と櫛原功一氏、そして新津健氏の業績だ。

このうち小野氏が着目したのは「笏のポーズ」、ならびに中空円錐形土偶（図3-（1））との関わりである（小野 1989）。氏の主張と論展開の概要は以下のとおりである。

- ・土偶付土器における土偶は、土器内面側に両手を表現し、身体正面で組まれた「笏のポーズ」をとるものが多い。
- ・中空円錐形土偶も「笏のポーズ」をとるものが多い。
- ・中空円錐形土偶とは自らの胎内で子を育む女性像であり、「笏のポーズ」＝妊娠の象徴である。
- ・共通するポーズをとる土偶付土器やその類品である土偶装飾付土器の性質もまた妊娠に関わるものである。
- ・顔面把手付土器は、手の表現がないために「笏のポーズ」は見られないが、女性を象徴していることには違いないので、円錐形土偶や土偶付土器等と同じ性質をもつ。

櫛原功一氏の成果 櫛原氏は、土偶装飾付土器を対象とし、その変遷過程と性質について論じた（櫛原 1997）。変遷過程としては、中期前半の猪沢式末期に出現すること、藤内式期後半には頭部がみみずく把手に変化して把手付土器の祖型の1つとなること、井戸尻式期には顔面把手付土器へ展開することなどを説いた。土偶装飾付土器の性質に関する氏の主張の概要は以下のとおりである。

- ・食べ物を作り出す土器に、妊娠・出産に関わる土偶を取りつけたものであり、土器の機能と女性原理の類似性を象徴したものである。
- ・土偶の両腕が大きく広げられ、土器を抱えている点、顔面の丸い両目が大きく見開いている点から見て、装飾さ

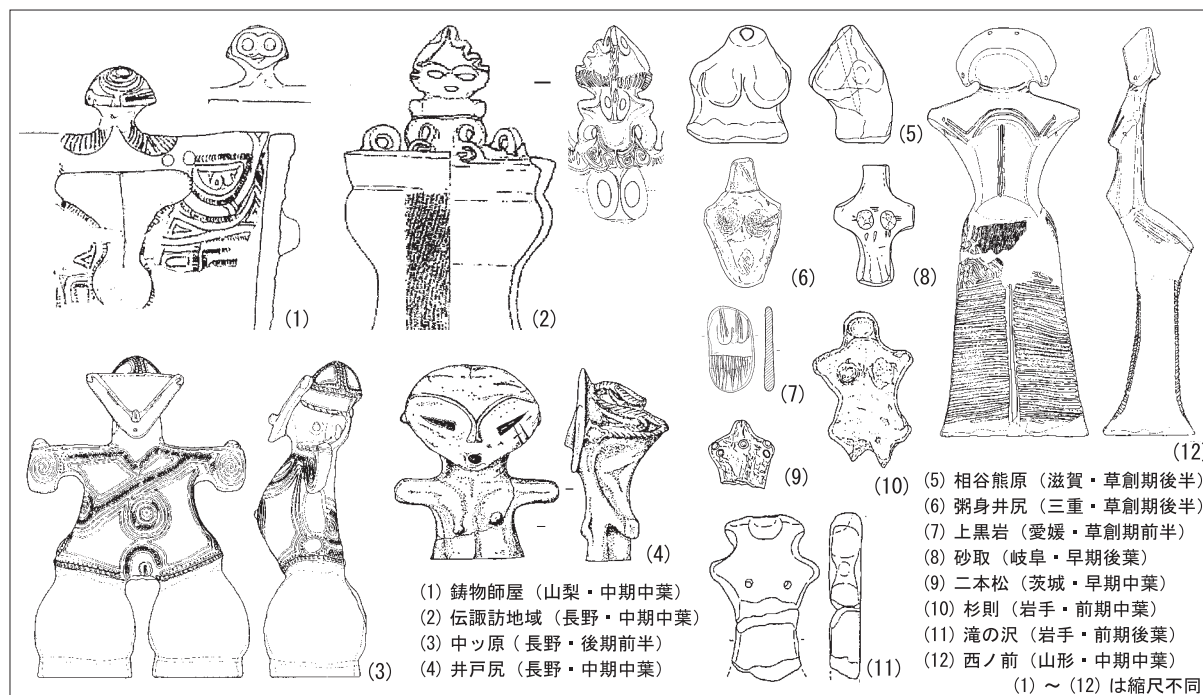


図1 多様な土偶関連資料の一端

れた土偶＝〈土器における食物調理を見守るもの、食物に霊的な効果を与えるもの〉だと考えられる。

新津健氏の成果 新津氏は、土偶付土器の成立と展開、性質について問うた（新津 2019）。成立したのは、中期中葉藤内式古段階における甲府盆地から八ヶ岳南麓であり、井戸尻式の後半期に、松本盆地や相模川流域、武蔵・相模西部、富士山麓付近に拡散したと論じた。性質と展開に関する氏の主張の概要は以下のとおりである。

- ・妊娠の象徴と食べ物起源神話の両方を表現したと見られる中空円錐形土偶からの系譜にあり、煮沸用深鉢形土器と土偶が合体した猪沢式期の土偶裝飾付土器から派生したものである。
- ・土偶付土器の土偶は丸みを帯び、両手を胸や腹にあてるポーズをとる。この点は中空円錐形土偶と共通する。
- ・中空円錐形土偶は妊娠呪具・豊穡を祈念する呪具だと考えられるので、土偶付土器もまた妊娠呪具・豊穡を祈念する呪具だと考えられる。
- ・また、土偶付土器の土偶は豊満な臀部をもち、土器に座像として取りつくように見える。この点は座産土偶のあり方と共通する。
- ・座産土偶は、出産シーンを表したものであると同時に排便シーンを表したものとも考えられる。この見立てが妥当ならば、ハイヌウェレ型神話⁽¹⁾との関わりから食べ物起源につながる可能性がある。
- ・以上のことから、土偶付土器も食べ物起源につながるものだと考えられる。食材を身体から取り出す土偶と、そ

れを煮沸し食べ物とする機能が一体化した容器であり、食べ物起源神話を表現する儀式に用いられた祭器である。

(3) 本稿で必要となる事前作業の抽出

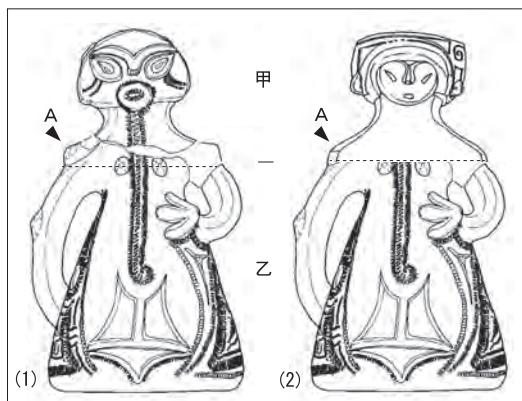
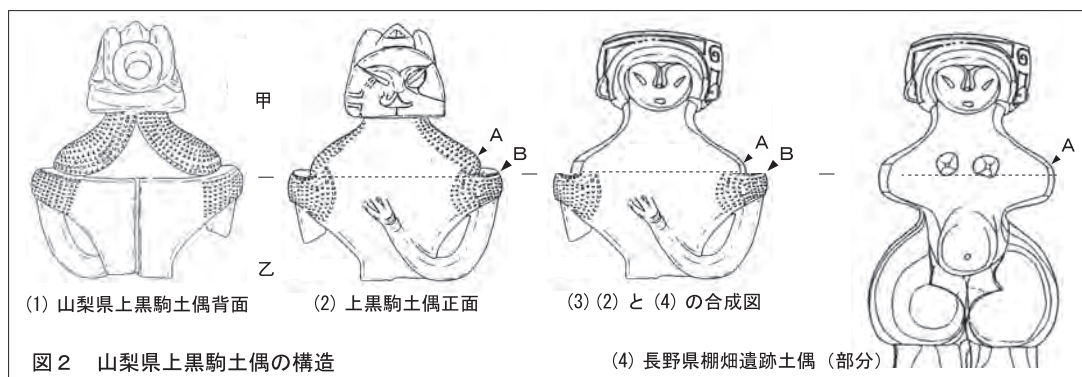
土偶裝飾付土器・土偶付土器における時期的変化や流れ、性質に関する従来の認識は上記のとおりである。これらの先学の尽力によって、議論の基盤が形成され、良好な研究土壌が形成されつつある。学問上の大切な果実である。

ただし、検討の余地はある。特に、性質に関しては認識を更に深化させていく必要があるようだ。そのための手段の1つは、観点——観察・考察する立場の見直しである。

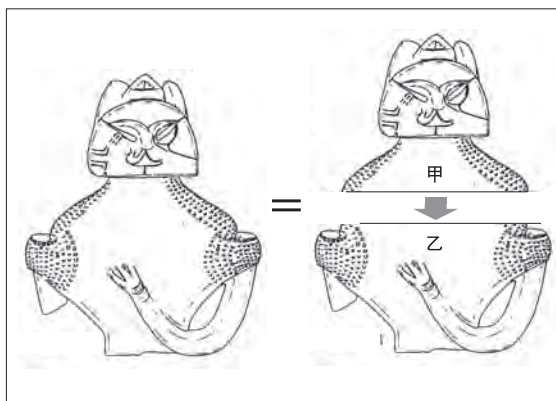
土偶裝飾付土器・土偶付土器の性質に関する論展開には、定式化された一つのロジックがある。そのロジックとは、土偶＝〈生や再生、生産を司る女神像〉という観点に依って立ち、それを起点にして女性原理やハイヌウェレ型神話等と絡めながら結論を導き出すものである。

土偶に関する上記の観点の歴史は古く、20世紀初頭まで遡る。例えば、1910年、乳房や尻、妊娠の表現を強調する事例が多いことから、大野雲外氏は土偶＝妊婦・安産の守り神と論じた（大野 1910）。1922年には、鳥居龍蔵氏により〈地母神〉説が提示され、大地の豊饒を司る女神の像とする考えが挿入されるようになる（鳥居 1922）。その後、この観点をベースにして様々な論者が多様な論を打ち立ててきた。本節で取り上げた3人の先行研究もまた、このいわば伝統的な観点を基盤にした業績だと位置づけられる。

この観点に基づく認識は受け入れやすい。確かに、乳房



(1) 山梨県鋳物師屋遺跡 57 号住土偶
(2) (1) と棚畑遺跡土偶の合成図



や尻、妊娠の表現が強調された土偶は少なくないので、土偶＝〈生や再生、生産を司る女神〉像として間違いないようにも思える。更には、そういった性質の想定される土偶が取りつく土器——土偶装飾付土器・土偶付土器に対し、妊娠・豊饒を司るもの／食べ物起源神話に関わる祭器だと捉えることは自然な流れだと考える。

しかし、私たちの認識がそこで留ってよいとは思わない。女性的であることを強調する土偶がある一方で、乳房や尻、妊娠の表現がない土偶もまた少なからず存在するからだ。初期の土偶では、その数比は半々であることから、男女をそれぞれ象っていた可能性が指摘されている（山田 1999）。そもそも性を超越したものである可能性も指摘されている（佐原・小林 2001）。資料に即して冷静に観察し、土偶＝〈女性像を示すもの・生や再生、生産を司る女神像〉といった観点に縛られることなく、中立的に捉え直すべきだとする意見も根強くある（松室 2013 ほか）。

また、少し視野を広げるだけで、その造形意図に悩まされるような土偶が多数見出せる。例えば、わざわざプレート状の顔面（≒仮面）を取りつけた土偶がある（図 1-（3）・（4））。その反面、頭部や顔面の表現が曖昧な土偶も存在する（図 1-（5）～（12））。あるいは女性像とは程遠い、厳めしい体格・容貌をもつ土偶も存在する（図 2-（2））。

なぜ、このような不思議な造形がわざわざ作り出されていたのだろうか。図録や講座資料等を作るたびに痛感する

ことだが、その理由について、お茶を濁すことなく円滑に、土偶＝〈生や再生、生産を司る女神像〉とする観点だけで説明することはかなり難しい。私たちは認識を更に深化させる必要がやはりある。

その必要性に応じるための手段の 1 つは、観察・考察する立場——観点の見直しである。敢えてこれに取り組むことで、折角残されている多様な現象をより深く、より包括的に理解するための糸口が見つかる可能性がある。

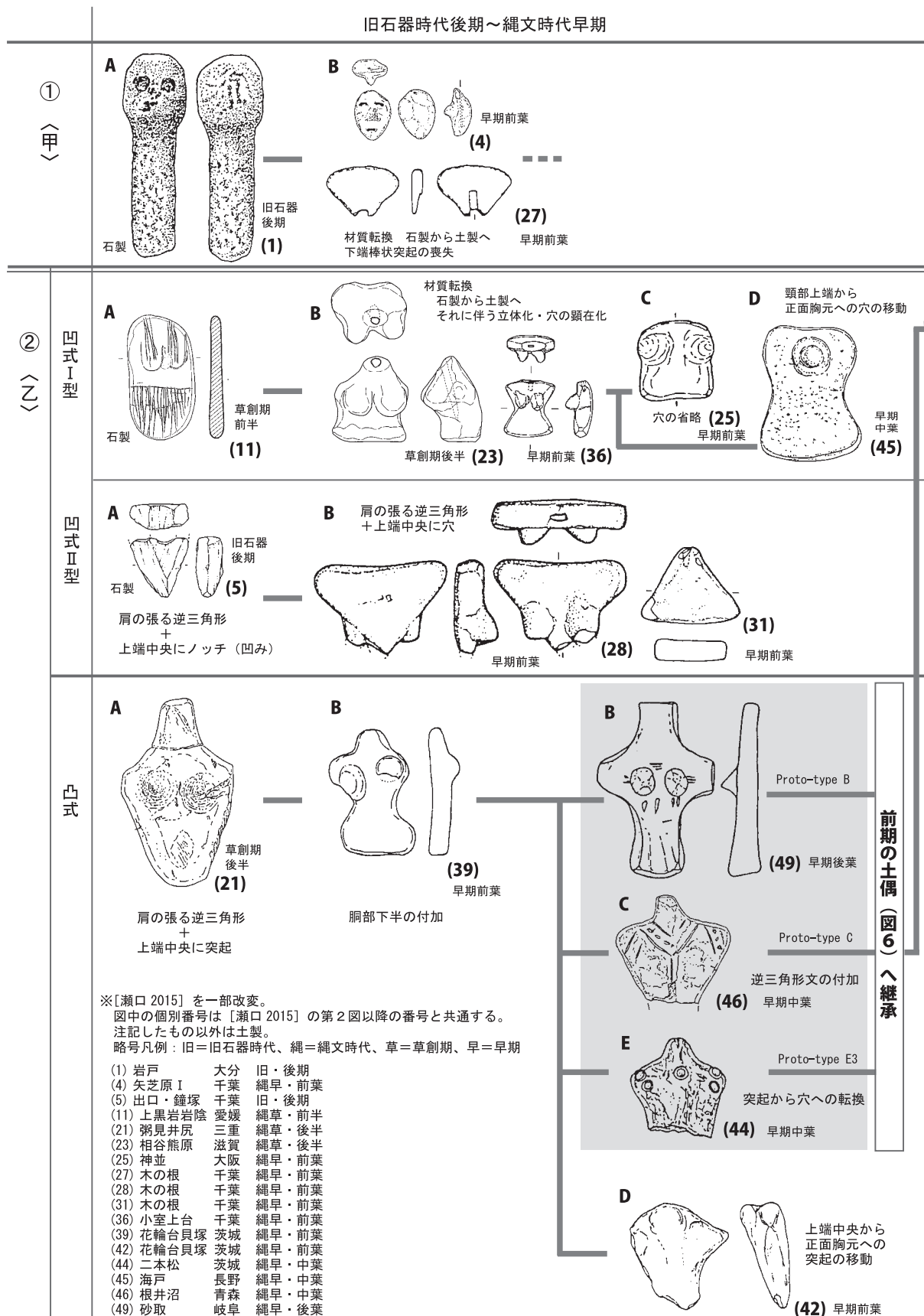
そこで本稿では、事前の作業として、土偶そのものの性質に関する観点を第 2 の章で整え、それから第 3 の章で土偶装飾付土器・土偶付土器を本格的に検討することにする。

なお、土偶装飾付土器・土偶付土器の時期的変化や流れについては、櫛原氏と新津氏の尽力により整備されてきた。精緻な土器編年に裏付けられた個々の資料の時期的な位置づけはほぼ確実な状況にある。ただし、上記で必要性を訴えた新たな観点の付加により、出現の背景や展開過程に関して認識深化も期待できる。そこで本稿では、展開過程についても第 3 の章で捉え直すことにする。

2. 事前作業／観点の整備

(1) 中期土偶の検討から見出せるもの

上黒駒土偶の分析 土偶装飾付土器・土偶付土器の検討の事前作業として、本章では土偶そのものに対する観点を整え直す。その第一歩として、山梨県上黒駒出土の土偶（図



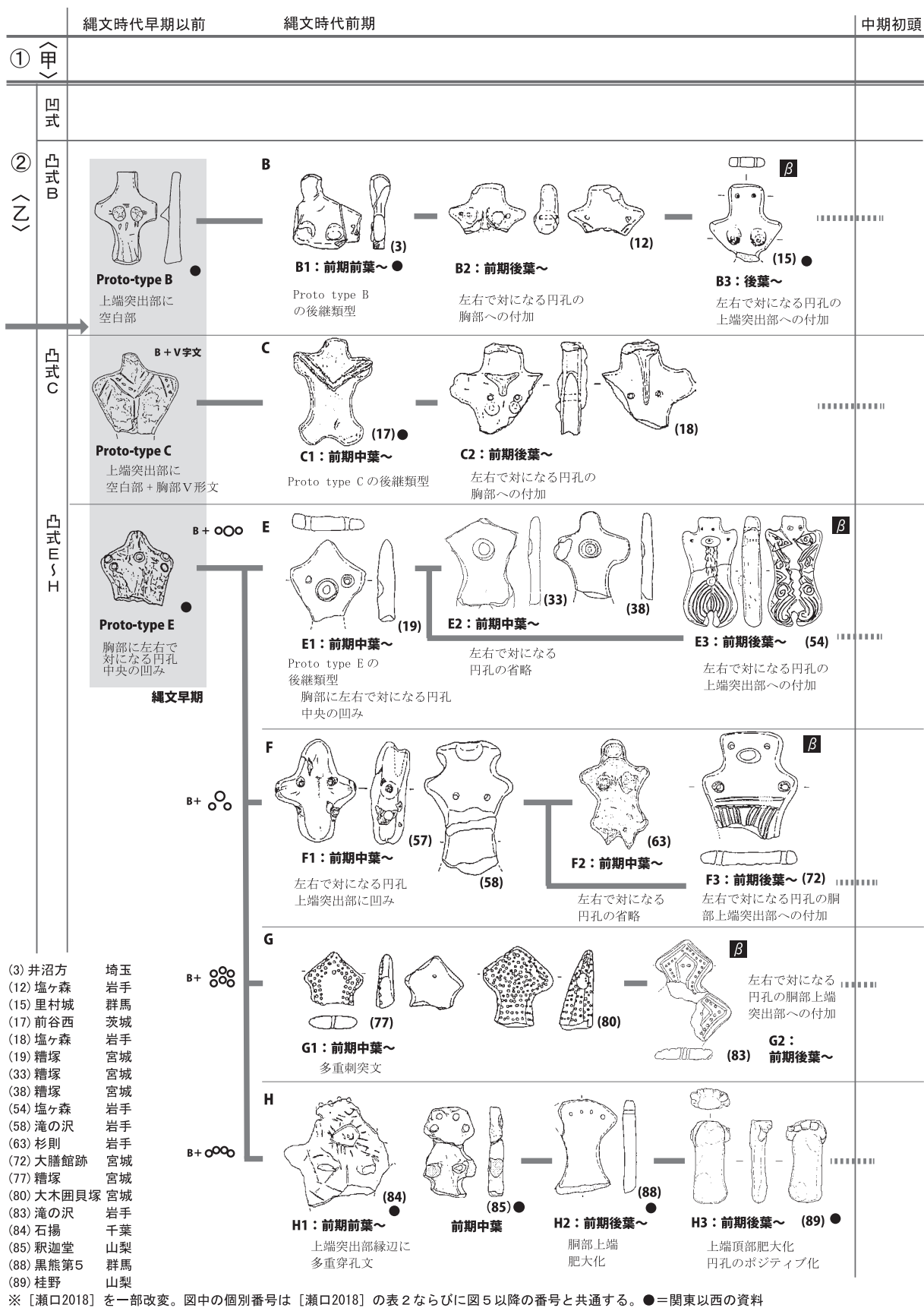


図6 初期土偶の類型と組列（2）初期土偶後半期（瀬口 2018 改変）

2-(1)・(2)：櫛原 1997 ほか) を取り上げたい。

この資料は、必ずしも中期土偶の典型例ではない。しかし、一般書のグラビアをしばしば飾り、広く周知されている例だ。その上、以下で示すように土偶の根本的性質を考える上で極めて示唆に富んだ造形なので、観点整備のための第一歩として取り上げてみる。

上黒駒土偶は縄文中期中葉の資料である。この土偶が示唆する最大のポイントは、土偶とは〈一体だけで成立しているとは限らない像〉であることだ。すぐには受け入れにくいこの点を理解するためには、わざわざ不自然な形に造形された上下2段の肩部に着目する必要がある。

着目に際して必要となる作業は2つある。第1の作業は、わざわざ不自然な形に造形された上下2段の肩部に1本の補助線を水平方向に引くことだ（図2-(2)）。以下、この補助線より上位を〈甲〉と呼び、下位を〈乙〉と称する。

第2の作業は、ほぼ同じ時期のより普遍的な典型事例である長野県棚畑土偶（図2-(4)：茅野市教委 1990）と比較することだ。比較すべき部位は、上黒駒土偶の〈甲〉の輪郭と、棚畑土偶の〈頭部～腕の上端〉の輪郭である。

図2-(3)は、比較すべき2つの輪郭の相似性を指摘するために作成した合成図である。上黒駒土偶から〈甲〉の部分を消去し、棚畑土偶の〈頭部～腕の上端〉を取りつけてある。ここで強調したいのは、合成図（図2-(3)）と上黒駒土偶（図2-(2)）の輪郭が完全に一致することだ。つまり、わざわざ不自然な形をとる上下2段の肩に隠されているのは、棚畑土偶の頭部パーツ〈甲〉が上黒駒土偶の胴部パーツ〈乙〉に取りついた姿である。この土偶の実像とは、一体だけで成立している像ではなく、2つのパーツが取りつき、取りつかれることで成り立つ像に他ならない²⁾。

鋳物師屋遺跡例の分析 同様なあり方は、山梨県鋳物師屋遺跡 57 号住居出土の円錐形中空土偶でも見出せる（図3-(1)）。本資料は上黒駒土偶とほぼ同じ縄文中期中葉に造形されたものである（櫛形町教委 1994）。

注目すべきポイントは両肩の形状だ。〈いかり肩〉のように突出したその端部は、上黒駒土偶の不自然な肩と同様な分析が可能である。図3-(2)の合成図が示すように、この肩はいわば棚畑土偶の頭部パーツ〈甲〉が、鋳物師屋土偶の胴部パーツ〈乙〉に取りついた状態を示唆するものである。この土偶の実像もまた、2つのパーツが取りつき、取りつかれることで成り立つ像に他ならない。

小結 以上を整理したい。土偶とは〈一体だけで成立しているとは限らない像〉である。わざわざ不自然に造形された上下2段の肩、いかり肩は、頭部のない胴部パーツ〈乙〉に頭部パーツ〈甲〉が取りついたことを示す意図的な表現である。この重層的な構造に隠された暗示的な意図を汲むことで、私たちは土偶の根本的な性質に関する観点を更新できるだろう。すなわち、土偶とは〈甲〉・〈乙〉2つのパーツからなるものであり、それらが取りつき、取りつか

れることで成立する像である（図4）。

この観点は、初期土偶の段階に遡っても汎用可能だと言えそうだ。次節では、この点について突き詰めてみたい。

(2) 初期土偶の検討から見えるもの

初期土偶における甲・乙とその出現時期 初期土偶関連資料とは、日本列島の後期旧石器～縄文前期の土偶、ならびにそれに類する石製品を指す。これらは我が国における土偶の原型であり、その検討は、土偶のそもそものあり方を知る上で重要だ。これらについては拙稿（瀬口 2015・2018）において私見を示してきたところなので、詳細はそれらに譲ることとし、以下、要点を述べていきたい。

前節で見た中期土偶に関する観点を踏まえながら、そのバリエーションと変遷過程を整理すると、図5・6のようになる。ここで強調しておきたい点は、初期土偶においても〈甲〉と〈乙〉の2パーツが見て取れること、ただし中期土偶のそれとは異なり、それぞれは完全に別のパーツとして造形されていることである。

頭部パーツ〈甲〉は、図5の①に示したものが該当する。胴部の表現が曖昧な(1)や、胴部が完全に欠落している(4)・(27)がある。最も古い事例は(1)で後期旧石器に位置づけられ、(4)・(27)は縄文早期前葉に比定される。

胴部パーツ〈乙〉に該当するものは、上記の事例を除いた図5・6の資料である。最古級のものとして後期旧石器の資料(5)や縄文草創期の資料(11)・(23)・(21)がある。

これらのことから、〈甲〉と〈乙〉のパーツは初期土偶の黎明期から揃って現れていたことがうかがえる。

初期土偶における乙の構造 いま一つ強調したい点は、胴部パーツ〈乙〉に通底して見られるその特徴である。

おぼろげながら顔面らしい表現を加える例外も最終段階に現れるが、それは東北地方の前期後葉以降に限って部分的に見られる造形だ（図7-β）。

以上の例外を除けば、いずれも胴部上端中央に位置するはずの頭部・顔面の造形が曖昧模糊としている点、あるいは完全に欠落している点で共通項をもつ（図7-α）。この共通項は、手を替え、品を換えながら各細分類型に通底して見られ、また時期を通じて継承され続けている。

この特徴を、技術的な稚拙さに関連づけて理解しようとする意見もあるが、多くの場合で土偶そのものは一見して人体を想起させるだけの表現力をもって造形されていることを踏まえれば、妥当ではないだろう。むしろ注視すべきなのは、頭部・顔面の代わりに、小穴や凹み、空白といった〈うつろ〉な空間が、胴部上端中央に必ずわざわざ設けられている点だ。胴部パーツ〈乙〉にも多様な形態があるけれど、胴部上端中央に〈うつろ〉な空間を設けるあり方は、手を代え、品を替えながら共有されており、この点において同一の構造をもつ一群として認識できよう。

2つのパーツが意味するもの 以上で見た2つのパー

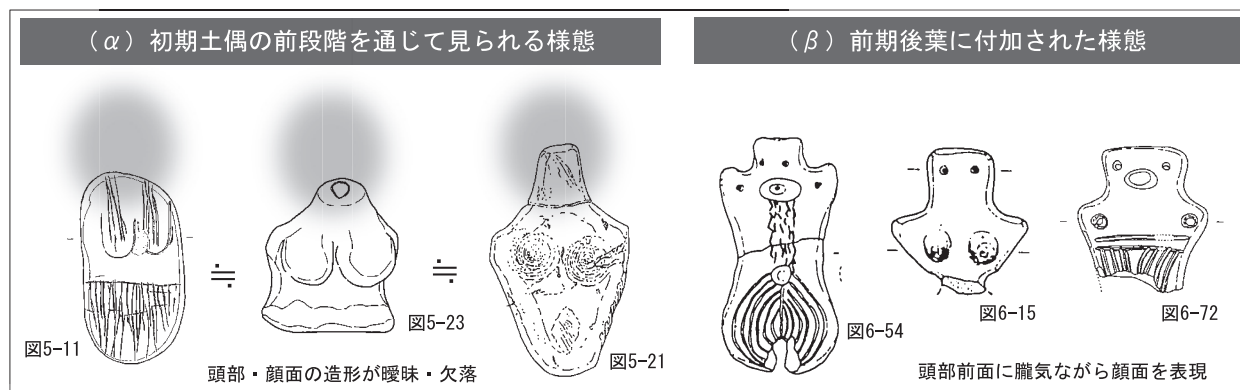


図7 初期土偶における2つの様態とそれぞれの共通項

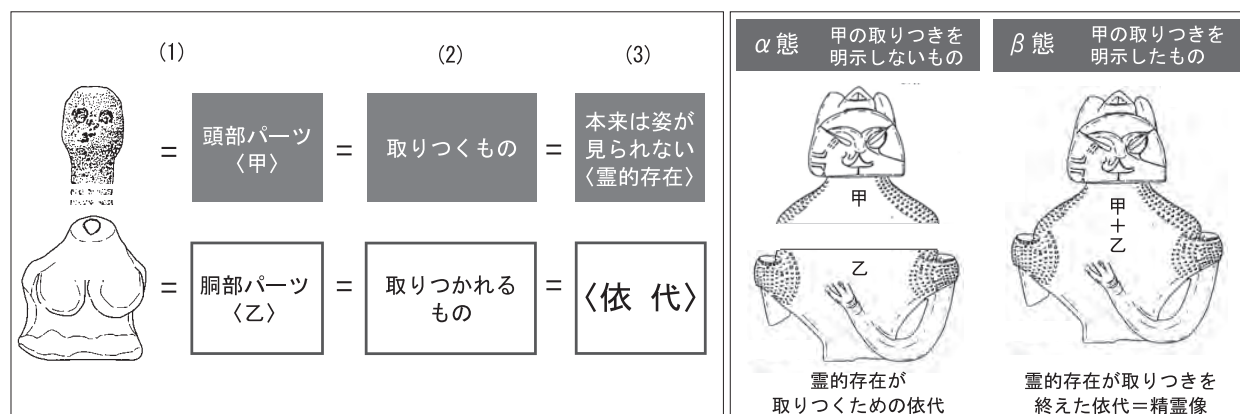


図8 〈甲〉と〈乙〉の意味

図9 α態とβ態の意味

ツが意味するところについて、改めて4つのポイントを設け、更に認識を深めてみたい。

第1のポイントは、上記の〈甲〉と〈乙〉がそれぞれ不完全なパーツだという点だ。頭部パーツ〈甲〉とは胸部パーツ〈乙〉において欠落している頭部そのものである。本来あるべき位置を勘案するならば、〈乙〉の胸部上端中央にある〈うつろ〉な空間を満たすものに他ならない。〈甲〉と〈乙〉に分離されている2つのパーツは、プラグとソケットの関係に例えられる一対のものであり、両者は組み合わせられることで一体の像に近づくものといえる(図8-(1))。

第2のポイントは、中期土偶との相似性である。上記の初期土偶における〈甲〉と〈乙〉の関係は、図4で示した中期土偶における〈甲〉と〈乙〉の関係に等しい。胸部パーツ〈乙〉とは取り付けられるものであり、頭部パーツ〈甲〉とは〈乙〉に取りつくものに他ならない(図8-(2))。

第3のポイントは、〈甲〉と〈乙〉の間にある数的差異だ。初期土偶における胸部パーツ〈乙〉の出土数は130点を超える一方で、頭部パーツ〈甲〉は多く見積もって5点程度である。〈乙〉に比べ、最大でも5/130しかないことを素直に受け入れるなら、未発見資料が多いというよりも、実際に具象化されること自体が稀だったと言うべきだ。

この数的な差異から〈甲〉・〈乙〉の意味が見出せそうである(図8-(3))。すなわち、ほとんど具象化されることのない〈甲〉とは、存在するはずだが実際には見えない

ものに他ならない。取りつくものだという点も踏まえるなら、〈甲〉が意味するものは霊的存在だと考えるのが妥当だろう。霊的存在だからこそ目にすることができず、故に〈甲〉は基本的に具象化されることがなかったのである。

一方の〈乙〉とは、目にすることができない霊的存在を取りつかせるための器、すなわち依代である。だからこそ、宿りを可能にする〈うつろ〉な空間を常に伴うものとしてその身体は造形され続けていたと考えられる。

第4のポイントは、様態のバリエーションである。中期土偶と初期土偶を対比した時、様態に違いがあることに気づく。1つは、霊的存在〈甲〉を明示せず、依代〈乙〉だけを具象化したものである(図9左)。以下、これをα態と呼ぶ。初期土偶は基本的にα態を採用するが、α態を採用する造形は初期土偶だけに限らない。前期後葉・中期初頭以降でも、頭部や顔面が曖昧な／存在しない土偶は造形され続け、優品も見られる(図1-(12)ほか)。土偶の出現期から連綿と広く造形されているという意味で、このα態は定番的存在だったといえる。

もう1つは、霊的存在〈甲〉を明示して、それが取りついていた姿を具象化したもの——いわば霊的存在のインストールを終えた精霊像として製作されたものである(図9右)。以下、これをβ態と称する。

β態は前期後葉～中期初頭に付加された新たな様態であり、以降、霊的存在〈甲〉の取りつきを明示した像として、

棚畑土偶のような優品をはじめ、様々な類型へ派生した（図2-（4）ほか）。プレート状の顔面（≒仮面）が取りついた像もまた、そのバリエーションの1つに数えられるだろう（図1-（3）・（4））。わざわざプレート状を呈した顔面は、取りついた霊的存在〈甲〉をことさらに強調して象ったものに他ならない^③。

小結 以上を整理したい。本節では、初期土偶に遡って対象を広げ、中期土偶で見出した観点の汎用性を検討した。結果、土偶の根本的性質として以下の諸点が提示できる。

- ・土偶は本来〈甲〉・〈乙〉2つのパーツからなるもので、頭部パーツ〈甲〉が胴部パーツ〈乙〉に取りつくことで成立するものである。
- ・〈甲〉とは本来は目にすることができない霊的存在で、〈乙〉とはそれが取りつくための依代である。
- ・存在様態としては、 α 態：依代〈乙〉だけを具象化したものと、 β 態：霊的存在〈甲〉が〈乙〉に取りついた姿を具象化したもの（＝精霊像）の二者がある。
- ・ α 態は初期土偶の黎明期から連綿と造形され続けた定番的な様態であり、 β 態は前期後葉ないし中期になって付加された新規の様態である。

土偶に対する観点を以上のように整理するなら、土偶装飾付土器・土偶付土器についても、従来の〈生や再生、生産〉ではなく、〈依代や霊的存在、精霊像〉といったキーワードをまずは下地にしながら認識していくことになる^④。次章では、資料に即しながら更に認識の深化を試みたい。

3. 土偶装飾付土器・土偶付土器の根本的性質と展開過程

(1) 土偶装飾付土器・土偶付土器の分類

作業の方針 基礎作業として資料の大別と細分を行う。分類は、土器と土偶の位置関係、土偶の形態・形状などに着目して行う。

なお、対象資料の出土地、分類、時期については表1にまとめた。このうち、時期については、基本的に先行研究（櫛原 1997・新津 2019）を参考に比定する。時期区分は、櫛原氏が用いた区分（櫛原前掲）におおむね準じ、①諸磯式、②十三菩提式、③五領ヶ台式・北裏C式、④貉沢式1期、⑤貉沢式2期、⑥貉沢式3期、⑦新道式、⑧藤内式1期、⑨藤内式2期、⑩藤内式3期・井戸尻式、⑪曾利式に弁別する。このうち、①・②は前期後葉に相当し、③～⑩は中期初頭～中期後葉に相当する。

大別と β 態の細分 前章で見た土偶と同様に、土偶装飾付土器・土偶付土器においても α 態と β 態に大別できる。 α 態に位置づけられる資料は図10-1・2で、頭部・顔面の造形が曖昧模糊としたものや欠落したものである。 β 態に位置づけられる資料は図10-3～図12-43で、土偶の顔面を明示したもの（そのように復元可能なもの）である。

現状における数量比としては、 β 態が多く、 α 態が少ない。ただし α 態は、顔面が明示されないために土偶装飾付

土器・土偶付土器として気付かれにくく、ゆえに現状の資料数が少ない可能性もある。この点に関連する認識の深化——土偶装飾付土器・土偶付土器における α 態と β 態のそれぞれの意味なども含めた理解——は今後の課題とし、今回は β 態を中心に検討を進める。

β 態はA～Fに弁別できる。いずれも土器内側を向いた土偶を土器外面に取りつけたものである。A～Dは櫛原論文（櫛原前掲）における土偶装飾付土器に相当し、E・Fは新津論文（新津前掲）における土偶付土器に相当する。

以下、必要に応じて細分しながら、各類型の内容について述べる。分類に際しては前章で得た観点も慎重に参照し、土偶そのものの造形——〈甲〉・〈乙〉に相当する可能性のある要素やそれらの存在形態・位置・関係性等——についても目を配ることにする。

A 図10-3が該当する。土器口縁部の突起によって土偶頭部を表現する。土器外面の突起下には、土器文様帯の組み合わせによって十字形の土偶の胴部背面を表現する。両腕に相当する部分は、連続爪形文を施した半隆起線文5条を重ねて表現し、器を抱くように土器口縁に巡らす。頭部として三角形板状の土器突起をあてがう。その内面には、ハート形を呈したプレート状の顔面が取り付けられている。時期的には五領ヶ台Ⅱb式併行期に位置づけられる。

B 図10-4が該当する。土器外面に半立体的な板状の土偶を取りつける。土偶頭部は頭頂部が平坦ないわゆる河童形を呈し、頭部内面にはおぼろげな顔面を描く。土偶背面が十字形を呈する点、ならびに長く伸びた腕が土器を抱いている点でAに相似する。かたや、土偶が半立体であり、文様帯や線刻による表現ではない点においてAと相違する。時期的には貉沢式1期に位置づけられる。

C 図10-5～図11-24が該当する。造形の相違から、C1～C4に細分できる。

【C1】 図10-5が該当する。時期的にはAと同じ五領ヶ台Ⅱb式併行期に位置づけられる。土器口縁部の突起によって土偶頭部を表し、土器外面の文様帯と線刻によって土偶胴部を形容する。土偶頭部を表す突起は小さな鉢状を呈する。頭部の土器内面側には、上半部がハート形を呈するプレート状の顔面が取り付けられている。突起下の土器外面には、十字形を基調とする土偶背面を土器文様帯と線刻の組み合わせにより表現する。胴の両脇から伸びる腕が土器を抱く。土偶背面のあり方から、以下の諸点が見いだせる。

- ・C1の土偶背面は、T字形の胴部パーツに、⊥字形の頭部パーツが取りつくもので、重層的な構造になっている。
- ・この重層的な構造は、中期の上黒駒土偶や鋳物師屋遺跡の円錐形中空土偶における〈甲〉と〈乙〉の重層的な構造（図2～4）に近似するものである。従って、C1におけるT字形の胴部パーツは〈乙〉、⊥字形の頭部パーツは〈甲〉に比定できるものだと考えられる。

表 1 本稿で対象とする土偶装飾付土器・土偶付土器一覧

No.	出土地	分類	時期		関係文献
1	長野 井戸尻	α 態	⑤	猪沢 2 期	櫛原功一1997「土偶装飾付土器」について『土偶研究の地平』4
2	山梨 釈迦堂	α 態	⑤	猪沢 2 期	山梨県教育委員会1986『釈迦堂』I
3	静岡 柏窪	β 態 A	③	五領ヶ台Ⅱb～Ⅱc併行（北裏）	櫛原功一1997「土偶装飾付土器」について『土偶研究の地平』4
4	長野 大石	β 態 B	④	五領ヶ台Ⅱc～猪沢 1 期	長野県教育委員会1976『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』茅野市・原村その1、富士見町その2
5	山梨 駒平	β 態 C 1	③	五領ヶ台Ⅱb～Ⅱc併行（北裏）	豊富村教育委員会1998『駒平遺跡』
6	東京 木曾中学校	β 態 C 2	⑥	猪沢 3 期	町田市教育委員会ほか1983『町田市木曾中学校遺跡』
7	東京 南養寺	β 態 C 2	⑥	猪沢 3 期	国立市教育委員会ほか1985『南養寺遺跡』1
8	山梨 千野	β 態 C 2	⑦	新道	櫛原功一1997「土偶装飾付土器」について『土偶研究の地平』4
9	山梨 鋳物師屋	β 態 C 2	⑦	新道	櫛形町教育委員会1994『鋳物師屋遺跡』
10	山梨 石之坪	β 態 C 2	⑧	新道～藤内 1 期	櫛原功一1997「土偶装飾付土器」について『土偶研究の地平』4
11	山梨 寺所第 2	β 態 C 2	⑦	猪沢 3 期～新道期	櫛原功一1997「土偶装飾付土器」について『土偶研究の地平』4
12	山梨 寺所第 2	β 態 C 2	⑥	猪沢 3 期	櫛原功一1997「土偶装飾付土器」について『土偶研究の地平』4
13	埼玉 下加	β 態 C 3	⑨	藤内 2 期	櫛原功一1997「土偶装飾付土器」について『土偶研究の地平』4
14	長野 内田雨堀	β 態 C 3	⑦	猪沢～新道	松本市教育委員会1982『松本市内田雨堀遺跡』
15	埼玉 北塚屋	β 態 C 3	⑨	藤内 2 期	埼玉県埋蔵文化財調査事業団1985『北塚屋』（I）
16	長野 藤内	β 態 C 3	⑨	藤内 2 期	井戸尻考古館2016『井戸尻の縄文土器』1
17	山梨 釈迦堂	β 態 C 4	⑩	藤内 3 期・井戸尻期以降	山梨県教育委員会1986『釈迦堂』I
18	神奈川 当麻	β 態 C 4	⑩	藤内 3 期・井戸尻期以降	神奈川県教育委員会1977『当麻遺跡 上依知遺跡』
19	長野 藤内	β 態 C 4	⑩	藤内 3 期・井戸尻期以降	櫛原功一1997「土偶装飾付土器」について『土偶研究の地平』4
20	東京 滑坂	β 態 C 4	⑩	藤内 3 期・井戸尻期以降	八王子市南部地区遺跡調査会1988『南八王子地区遺跡調査報告書』4滑坂遺跡
21	東京 三鷹第5中学校	β 態 C 4	⑩	藤内 3 期・井戸尻期以降	三鷹市遺跡調査会1979『三鷹市第五中学校遺跡発掘調査報告書』
22	長野 藤内	β 態 C 4	⑩	藤内 3 期・井戸尻期以降	櫛原功一1997「土偶装飾付土器」について『土偶研究の地平』4
23	東京 滑坂	β 態 C 4	⑩	藤内 3 期・井戸尻期以降	八王子市南部地区遺跡調査会1988『南八王子地区遺跡調査報告書』4滑坂遺跡
24	長野 藤内	β 態 C 4	⑪	曾利 I 期	櫛原功一1997「土偶装飾付土器」について『土偶研究の地平』4
25	長野 小池	β 態 D	⑦	猪沢～新道	松本市教育委員会1997『小池遺跡』I
26	長野 判ノ木山西	β 態 D	⑦	猪沢～新道	長野県教育委員会1981『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』茅野市・原村その3
27	長野 内田雨堀	β 態 D	⑦	猪沢～新道	松本市教育委員会1981『松本市内田雨堀遺跡』
28	長野 荒神山	β 態 D	⑦	猪沢～新道	長野県教育委員会1975『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』諏訪市その3
29	山梨 釈迦堂塚越北 A	β 態 E	⑧・⑨	藤内式	山梨県教育委員会1986『釈迦堂』I
30	山梨 穂坂	β 態 E	⑧・⑨	井戸尻式（中）	新津健2019「土偶付土器の実態と出現の背景」『縄文時代』第30号
31	長野 八幡坂	β 態 E	⑧・⑨	藤内式	新津健2019「土偶付土器の実態と出現の背景」『縄文時代』第30号
32	神奈川 大日野原	β 態 E	⑧・⑨	藤内式	新津健2019「土偶付土器の実態と出現の背景」『縄文時代』第30号
33	東京 小野路藤塚	β 態 F 1	⑧・⑨	藤内式	新津健2019「土偶付土器の実態と出現の背景」『縄文時代』第30号
34	山梨 古林第 4	β 態 F 1	⑩	藤内式～井戸尻式（古）	大泉村教育委員会2000『古林第 4 遺跡』
35	長野 諏訪周辺	β 態 F 2	⑩	井戸尻式（中）	川合剛1988「名古屋博物館所蔵の土偶関係資料」『研究紀要』第21巻 名古屋博物館
36	山梨 桂野	β 態 F 2	⑩	井戸尻式（中）	御坂町教育委員会2004『桂野遺跡』
37	東京 多摩ニュータウン No.72	β 態 F 3	⑩	井戸尻式（中）	財団法人東京都教育文化財団『多摩ニュータウン遺跡No.72・795・796遺跡』
38	長野 エリ穴	β 態 F 3	⑩	井戸尻式（中～新）	松本市教育委員会2018『エリ穴遺跡』
39	山梨 上野原	β 態 F 3	⑩	井戸尻式（中～新）	山梨県教育委員会1987『上野原遺跡、智光寺遺跡、切附遺跡』
40	長野 小淵沢	β 態 F 3	⑩	井戸尻式（中～新）	新津健2019「土偶付土器の実態と出現の背景」『縄文時代』第30号
41	静岡 尾畑	β 態 F 3	⑩	井戸尻式（新）	裾野市1996『裾野市史』考古
42	東京 野塩前原	β 態 F 3	⑩	井戸尻式（新）	清瀬市教育委員会1982『野塩前原』
43	神奈川 西ノ原	β 態 F 3	⑩	井戸尻式（新）	大井町遺跡調査会1996『西ノ原遺跡』

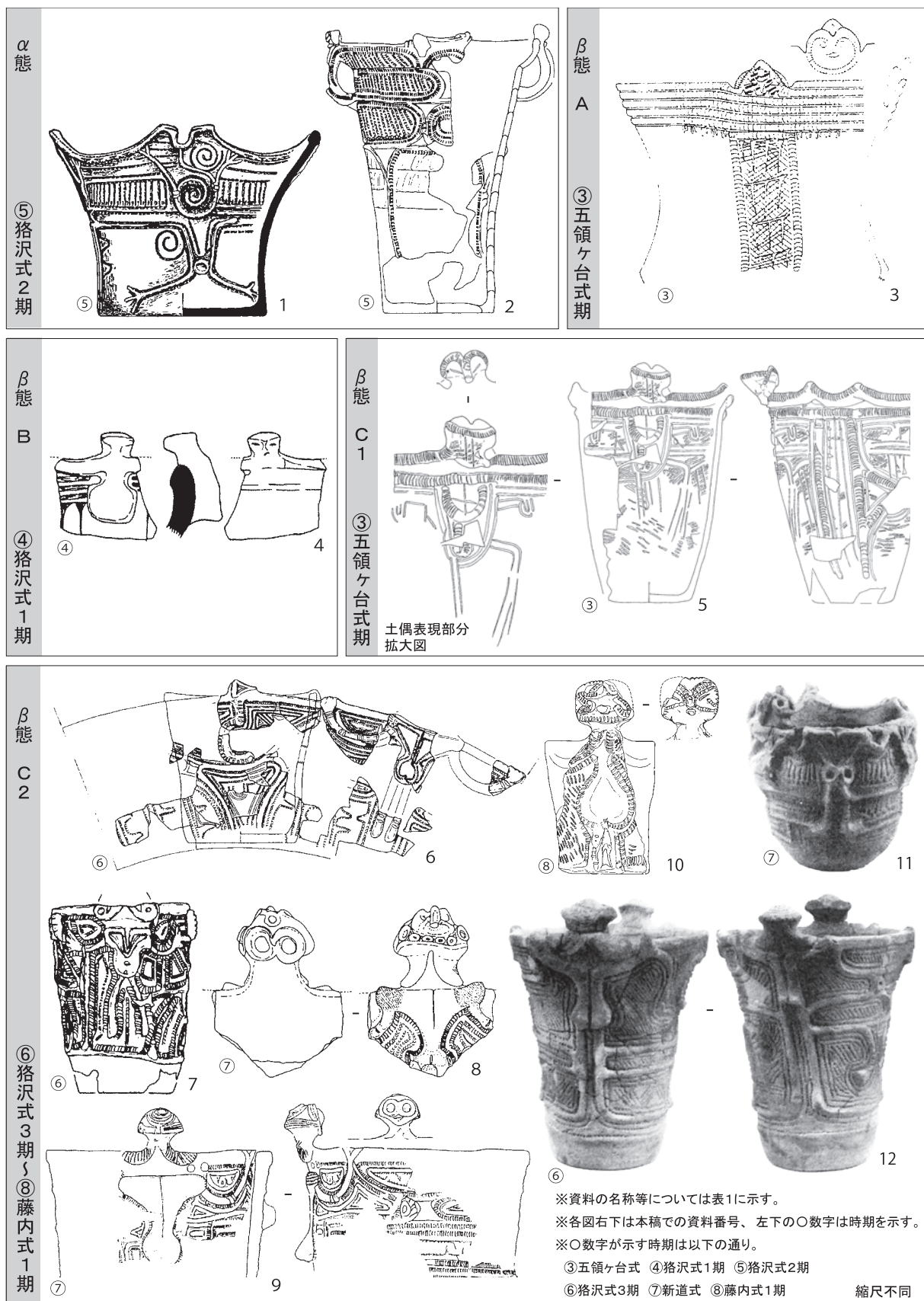
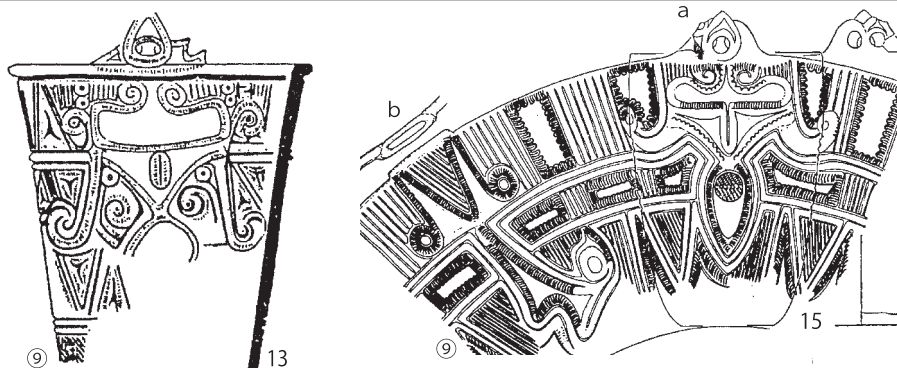


図 10 土偶装飾付土器・土偶付土器の類型（1）

β 態
C 3



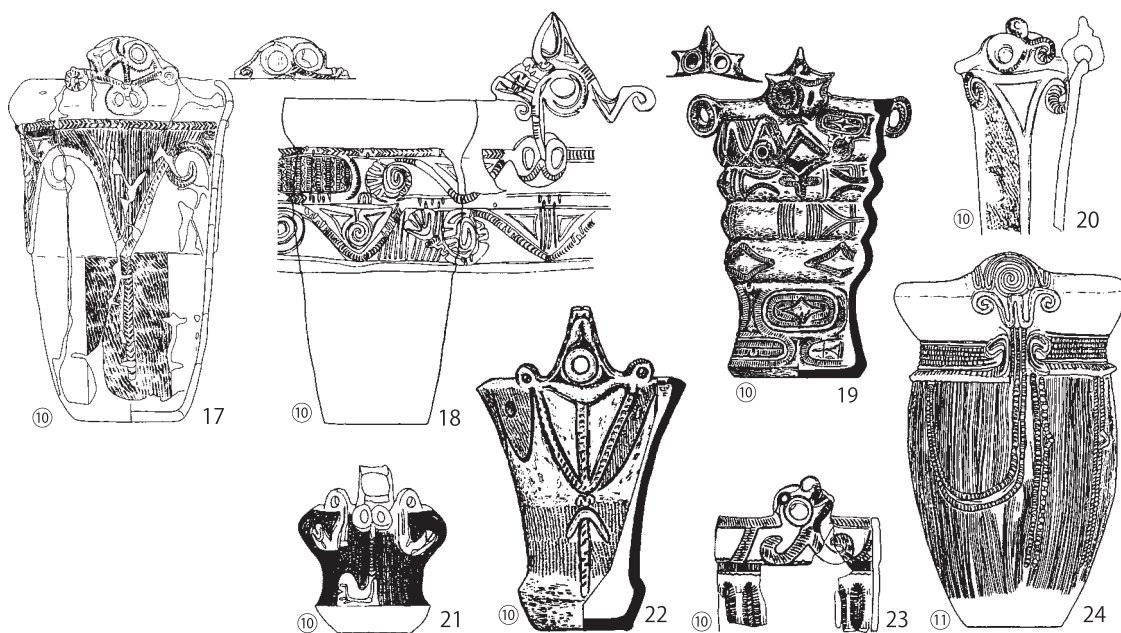
※15 でaと対となる土
偶表現bは、頭部を
持たない胸部以下の
α 態で、胸部上端中
央には穴を持つ。

⑦ 新道式
⑨ 藤内式2期

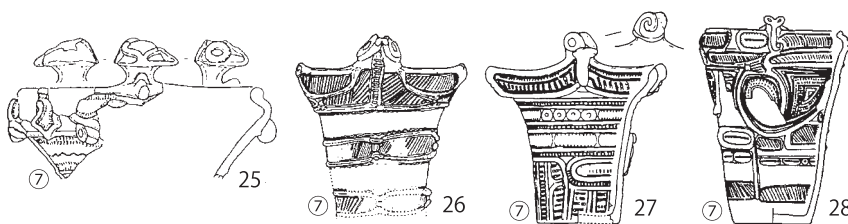


β 態
C 4

⑩ 藤内式3期
⑪ 曾利式



β 態
D
⑦ 新道式



※資料の名称等については表1に示
す。
※各図右下は本稿での資料番号、
左下の○数字は時期を示す。
※○数字が示す時期は以下の通り。
⑦新道式 ⑧藤内式1期
⑨藤内式2期
⑩藤内式3期～井戸尻式
⑪曾利式
縮尺不同

図 11 土偶装飾付土器・土偶付土器の類型（2）



図 12 土偶装飾付土器・土偶付土器の類型 (3)

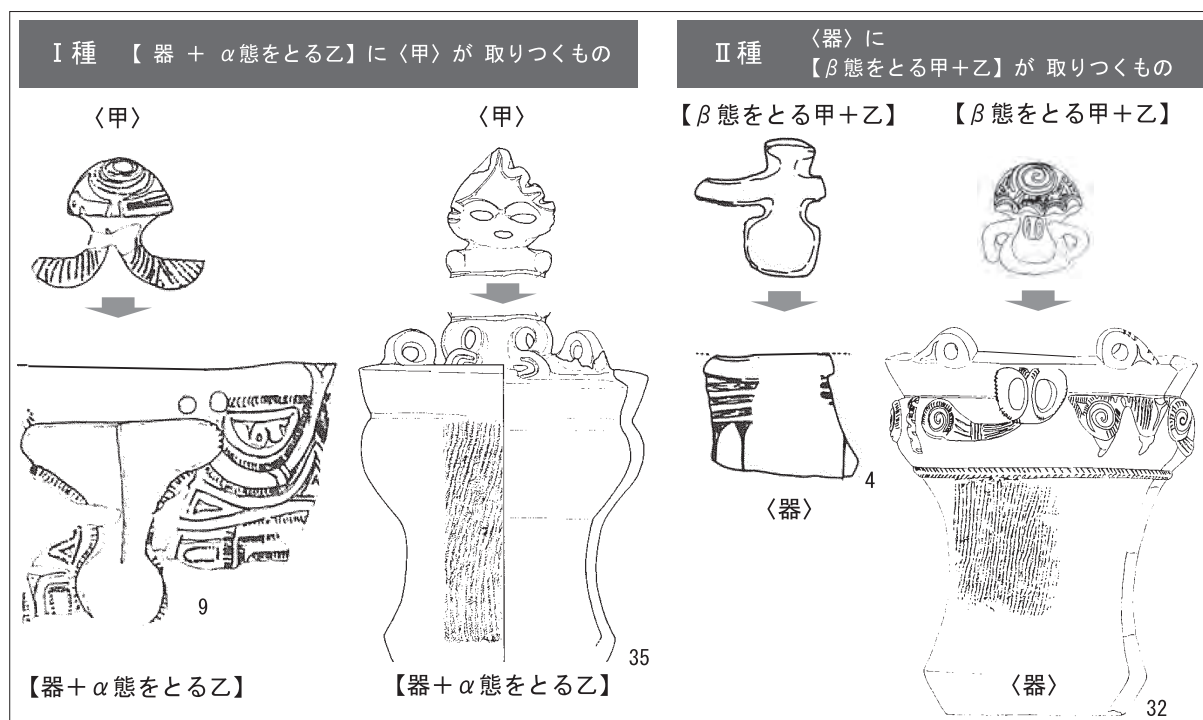


図13 土偶の取りつき方から見た類別

- ・Aの十字形の土偶背面も、5条の半隆起線文を介してT字形の胴部パーツに⊥字形の頭部パーツが取りつくものだと理解でき、C1等と同様に〈乙〉に〈甲〉が取りつくことで成立する重層的な構造を示すものといえる。
- ・Bも十字形を呈するが、〈乙〉に〈甲〉が取りつく重層的な構造を明示しないという点で、A・C1と相違する。

【C2】 図10-6～12が該当する。〈乙〉に〈甲〉が取りつく重層的な構造をとる点でC1と相似するが、〈乙〉を半立体により表現する点でC1と相違する。基本的に土偶頭部は中空もしくは穴をもつものとして造形する。その内面には、双環形を基本とするプレートが取り付けられている。長く伸びた両腕で土器を抱く。時期的には貉沢式3期～藤内式1期に位置づけられる。

【C3】 図11-13～16が該当する。〈乙〉に〈甲〉が取りつく重層的な構造をとる点でC2に相似する。ただし、胴部パーツ〈乙〉が土器文様化し、腕も蕨手文・渦巻文に変換している点、ならびに頭部パーツ〈甲〉が環状・双環状を呈する中空突起等に変換している点などでC2と相違する。時期的には新道式～藤内式2期に位置づけられる。

【C4】 図11-17～24が該当する。土偶表現の土器文様化が更に進行し、口縁部突起下の胴部パーツ〈乙〉は逆三角形・V字形・W字形等の文様へ変換し、土器文様に溶解しており、この点でC3と相違する。腕の配置には左右非対称のものも目立つようになる。頭部パーツ〈甲〉は双環状・環状・渦巻状の中空突起等として表現される。時期的には藤内式3期・井戸尻式～曾利式に位置づけられる。

D 図11-25～28が該当する。C3・C4と同様に、頭部パーツ〈甲〉は、双環状・環状・渦巻状の中空突起等として土器口縁部に取りつく。ただし、胴部パーツ〈乙〉の表現は、土器突起下の口縁部文様の中に溶解しており、長く伸びる腕の痕跡等が辛うじて見出せるに留まる。時期的には新道式以降のものに位置づけられる。

E 図12-29～32が該当する。上記A～Dとは、土偶の位置が異なる。A～Dは、土器口縁を境として、上位に土偶の頭部だけをあしらひ、下位には土偶の胴部上半・下半を造形するものである。これに対して本類とFは、土器口縁を境として、上位に土偶の頭部～胴部上半をあしらひ、下位に土偶の胴部下半だけを造形するものである。

Eは、頭部パーツ〈甲〉と胴部パーツ〈乙〉の重層的な構造を明示しない。両腕は胴部前面で自身の身体を抱くように配される。藤内式1期～井戸尻式に位置づけられる。

F 図12-33～43が該当する。頭部パーツと胴部パーツの重層的な構造を何らかの方法で明示して、〈乙〉に〈甲〉が取りつく形を具象化したものであり、この点でEと相違する。表現方法から、以下のF1～F3に細分できる。

【F1】 図12-33・34が該当する。頭部パーツ〈甲〉と胴部パーツ〈乙〉の重層的な構造を段によって明示する。時期的には藤内式1期頃に位置づけられる。

【F2】 図12-35・36が該当する。頭部パーツ〈甲〉と胴部パーツ〈乙〉の重層的な構造を沈線によって明示する。この点においてF1と相違する。前章で見た鋳物師屋遺跡の円錐形中空土偶（図3）と同様に、頭部パーツに付

帯する腕部上端をいかり肩状に突出させており、〈乙〉に〈甲〉が取りついたものであることを強調する傾向にある。時期的には藤内式3期～井戸尻式に位置づけられる。

【F2】 図12-37～43が該当する。F2に相似するが、頭部パーツ〈甲〉と胴部パーツ〈乙〉の重層的な構造を示す沈線、あるいはその下位の腕の表現が省略・消失している点で相違する。藤内式3期～井戸尻式に位置づけられる。

取りつき方から見た類別 土偶装飾付土器・土偶付土器のバリエーションは以上のとおりだが、将来的な論展開のために、土偶の取りつき方を2つに大別しておきたい。

I種は、〈甲〉と〈乙〉の重層的な構造を分割配置、段、沈線などで明示するものである（図13左）。A・C・D・Fが該当する。典型はC1・C2で、これからC3・C4・D・F1～3が派生し、これらの祖型としてAが位置づけられる。次に示すII種と比べ、重層的な構造ならびに腕を長く伸ばして器と一体化する〈乙〉を強調している点で異なる。図式的には【〈うつろ〉なる器+α態をとる〈乙〉】に〈甲〉が取りつく形となる⁶⁾。数的にはII種よりも多く、I種のほうが主流だったと考えられる。

II種は、B・Eが該当する（図13右）。I種と比べ、重層的な構造をわざわざ強調していない点で異なる。図式的には、〈うつろ〉なる器に【β態をとる甲+乙】が取りつく形となる。

(2) 土偶装飾付土器・土偶付土器の展開過程

以上の分類を踏まえ、第1の論点である展開過程について整理したい。結果は図14のとおりで、プレ段階を含めて5つの段階に整理できる。

プレ段階 前期後葉以前の初期土偶の段階である。前期後葉の東北地方で部分的にβ態が現れているが、それを除くと土偶そのものの存在形態はα態だけで構成されている段階である。土偶装飾付土器・土偶付土器においても、まだプロトタイプが成立していない。

段階1・2 段階1・2は、時期的にはいずれも五領ヶ台IIb式併行期に相当する。段階1は、土偶装飾付土器・土偶付土器におけるプロトタイプのAが出現した段階である。段階2は、C1の出現をその画期とするものである。〈乙〉に〈甲〉が取りつく形をより強調し、明示した段階である。

段階1・2は、β態を採用する土偶が様々な表現方法を取りながら本格的に出現し、取りつく頭部パーツ〈甲〉を明示する動きが包括的・構造的に顕在化した時期とほぼ重なっており、これと連動する形で成立した2つの段階として位置づけられる。

段階3 土偶装飾付土器の定型化が進んだ段階である。C2が顕在化した貉沢式3期が該当する。〈うつろ〉なる空間そのものである器と一体化した胴部パーツに、頭部パーツ〈甲〉が取りつく形が定型化した段階である。

段階4 バリエーションが2つの流れに分化した段階である。第1の流れは、C3・C4ならびにDへの展開である。〈うつろ〉なる器に土偶が取りつき、一体化する形が、土偶表現の土器文様への溶解という方向で新たに展開した段階である。C3とDが顕在化した新道式以降に生じた展開である。

第2は、EならびにF1からF3への展開である。〈うつろ〉なる器に土偶が取りつく造形が、上記とは別の形で進展したもので、〈土偶が取りついていること〉そのものをより強調する方向で展開した。いわゆる土偶付土器はこの方向への展開で新たに生じた類型だと言える。時期的には、EやF1が顕在化した藤内式1期以降に生じた展開である。

(3) 土偶装飾付土器・土偶付土器の根本的性質

土偶装飾付土器・土偶付土器のバリエーションとその展開過程は以上のとおりである。前章で取り扱った土偶と同様に、土偶装飾付土器・土偶付土器においてもα態とβ態の二者があるが、先に示したような理由から、β態を中心にその根本的な性質について整理し、認識を深めてみたい。

土偶装飾付土器・土偶付土器の性質を論じる際の従来のロジックは、土偶＝〈生や再生、生産を司る女神像〉という観点に依って立ち、それを起点にして女性原理やハイヌウェレ型神話等と絡めながら結論を導き出すものだった。このロジックで要となるのは、取りつく土偶の性質だ。その根本をどう捉えるかによって、土偶装飾付土器・土偶付土器の根本的性質に対する認識は大きく異なることになる。

確かに、一般的に存在する土偶そのものにおいて、乳房や尻、妊娠の表現が強調された事例は少なくない。従って、〈生や再生、生産を司る女神〉像として製作された土偶があることに間違いはないだろう。また、そういった性質の想定される土偶が取りつく土器——土偶装飾付土器・土偶付土器を、妊娠・豊饒を司るもの／食べ物起源神話に関わる祭器だとする従来の考え方にも首肯できる部分は多い。

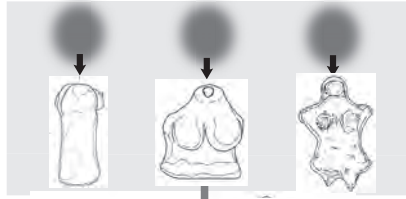
本稿では、従来の考え方を上記のように捉えながらも、更に認識を深化させるために敢えて土偶の性質に関する観点を見直し、その上で土偶装飾付土器・土偶付土器の性質を論じ直すことを試みたところである。

結果として、土偶とは、

- ①本来〈甲〉・〈乙〉2つのパーツからなるもので、胴部パーツ〈乙〉に頭部パーツ〈甲〉が取りつくことで成立するものであること。
 - ②〈甲〉とは本来目にすることができない霊的存在であり、〈乙〉とは〈甲〉を取りつかせるための依代であること。
 - ③その存在様態としては、依代〈乙〉だけを具象化したα態と、霊的存在〈甲〉が〈乙〉に取りついた姿を具象化したβ態（＝精霊像）の二者があること。
- などを明らかにした。すなわち土偶とは、霊的存在が取り

プレ段階：初期土偶の段階

～前期後葉



段階1・2：原型の出現期

五領ヶ台Ⅱb式期～

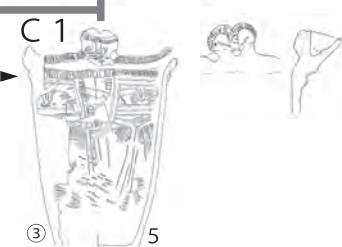
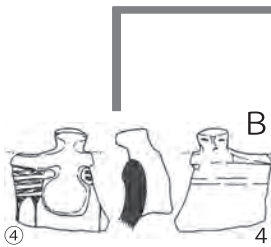


▶＝頭部と胴部の
分割ライン相当部

時期区分

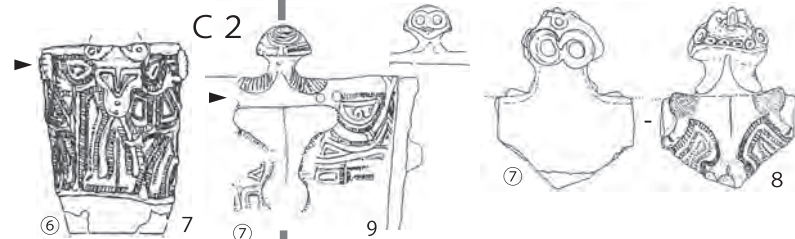
- ③五領ヶ台式
- ④貉沢式1期
- ⑤貉沢式2期
- ⑥貉沢式3期
- ⑦新道式
- ⑧藤内式1期
- ⑨藤内式2期
- ⑩藤内式3期～井戸尻式
- ⑪曾利式

※中期のα態は割愛



段階3：定型化の進行期

貉沢式3期～



段階4：
バリエーションの分化期

新道式～藤内式1期

【土偶表現の溶解】

【土偶表現の強調】

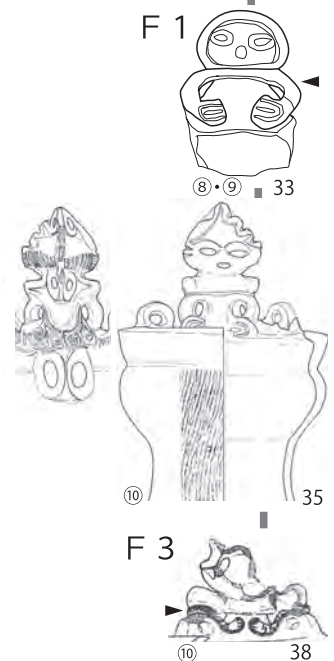
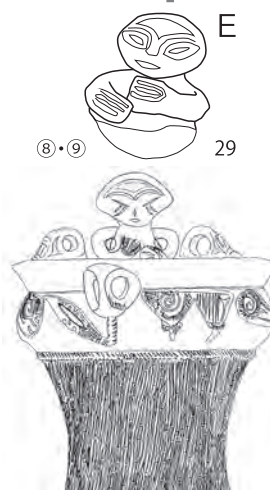
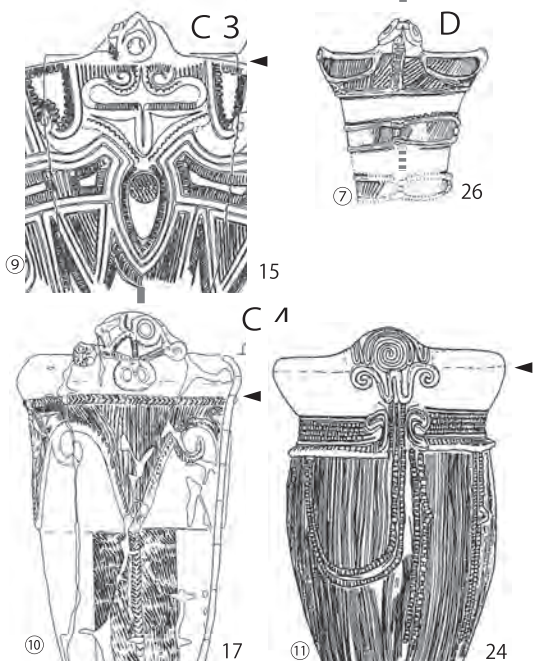


図14 土偶装飾付土器・土偶付土器の展開過程

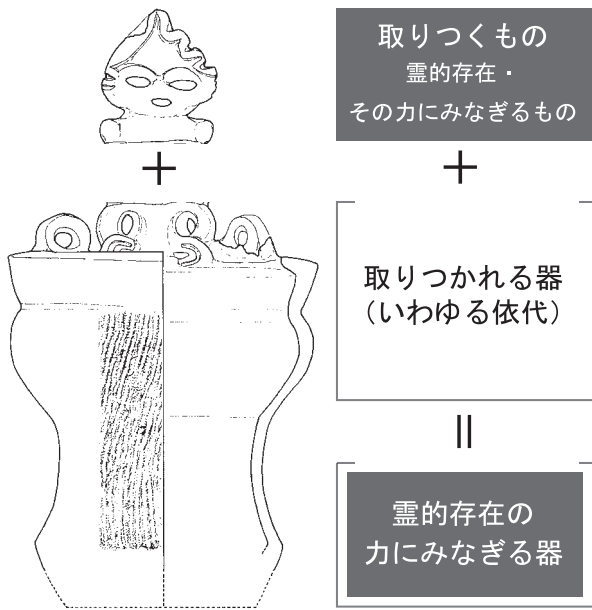


図15 土偶装飾付土器・土偶付土器の根本的性質

つき、その霊力がインストールされる依代である。

土偶装飾付土器・土偶付土器の根本的性質を考えていくうえで何より重要なのは、上記のような性質を持つ土偶が、器に取りつき、一体化・同一化しているという事実である。資料が示すこの点を素直に捉えるなら、その根本的性質とは、〈インストールされた霊的存在の力にみなぎる土偶〉が取りつく器——すなわち霊的存在の力にみなぎる器（図15）——だということになる（^{6・7}）。

この場合、使用者・製作者たちが取りつかせようとする霊的存在の性格によって、土偶や土偶装飾付土器・土偶付土器の性格もまた大きく変わることになる。例えば、生や妊娠を司る霊的存在を取りつかせた場合、その器にみなぎる力は生や妊娠に寄与するものとなるし、豊穡や食物創出、あるいは死を司るものを取りつかせた場合も、それぞれの性格に即した役割を果たすことになるだろう。

ここで想定すべき肝心なことは、〈自然は多様な霊的存在で満ちている〉といった世界観が縄文社会の精神基盤に存在していた可能性であり、必要と期待に応じてその霊的存在の力を社会生活の中に取り込む仕組みが存在していた可能性である。端的に示すなら、土偶や土偶装飾付土器等の根本的性質とは、その世界観や仕組みをこの世に具現化する道具——依代である。土偶の使用者・製作者たちは、期待に応じてカートリッジのように必要な霊的存在を選択し、それを依代たる土偶関連資料にインストールすることで霊的存在を利用する仕組みの中にいた。このような見解

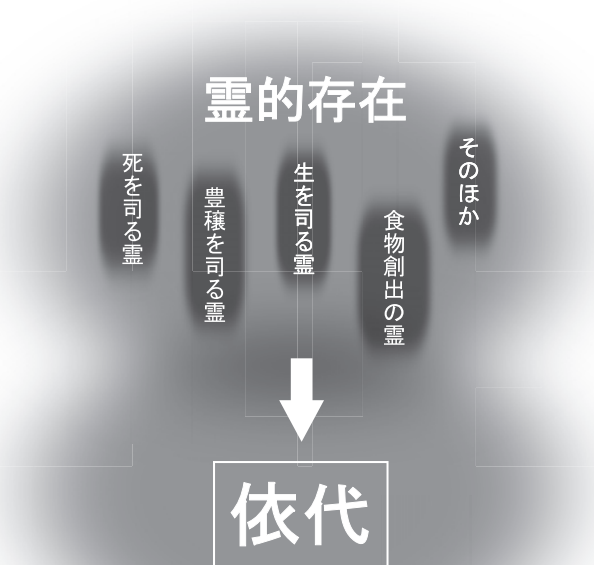


図16 土偶関連資料をとりまく世界観と仕組み

をここで示しておきたい（図16）。

上記の世界観と仕組みのもとに住まう者たちは、多様な選択の結果、数々のバリエーション（異本）を生み出した。それらがパターン化していく中で、我々が形式として認定できるようなまとまりが生じたものと考えられるし、特定の性質・役割に対応した形式が生まれたこともまた想定できるだろう。先学諸氏が土偶とその関連資料に見出してきた諸形式、あるいはそれらの性質・役割とは、上記のように想定される世界観と仕組みの中から生まれたものを掘り取り、読み取ってきた結果だといえるかも知れない。

4. 結論

(1) 土偶装飾付土器の根本的性質と展開過程

本稿では、土偶装飾付土器・土偶付土器を対象として2つの論点——根本的性質と展開過程——を設け、検討した。

このうち、土偶装飾付土器・土偶付土器の根本的性質については、まず土偶とは何かという観点から整理直す必要があったので、中期土偶の一部を起点とし、初期土偶に遡って検討した。その結果、土偶とは、霊的存在が取りつき、その霊力がインストールされる依代だということを見出した。そして、それが取りつく土偶装飾付土器・土偶付土器とは、〈インストールされた霊的存在の力にみなぎる土偶〉が取りつく器であり、すなわち霊的存在の力にみなぎる器だという見解に至った。

土偶装飾付土器・土偶付土器の展開過程については、そ

れが出現する以前のプレ段階（初期土偶の段階）から、出現期に相当する段階1・2（五領ヶ台Ⅱb式期）、定型化が進んだ段階3（貉沢式3期）、バリエーションが二分化した段階4（藤内式1期）への展開として把握した。

このうち、段階1・2は、土偶とその関連資料において、霊的存在〈甲〉を具象化するβ態が押しなべて本格的に採用されていく中で構造的に成立したものと理解できる。段階3への展開は、〈うつろ〉なる器と一体化した〈乙〉に霊的存在〈甲〉が取りつく形が強調され、定型化されていく動きの中で成立したものとして認識できた。そして、段階4におけるバリエーションの二分化とは、土偶表現が土器文様へ溶解していく方向と、取りつく土偶そのものがより強調されていく方向への分化だったことも見いだせた。

(2) 課題と展望

土偶装飾付土器・土偶付土器論としての本稿の限界と課題を整理しておく。本稿の限界の1つは、土偶装飾付土器・土偶付土器に類似する諸形式の検討が不十分な点である。本稿の目的を踏まえるなら、例えば縄文前期に現れた獣面把手付土器や、中期中葉以降に盛行する顔面把手付土器についても包括的に取り組むべきだが、まだできていない。

また、初期土偶から中期土偶への移行過程における土偶の型式学的検討も不十分であり、これも本稿の限界の1つとなる。特に、五領ヶ台式期から貉沢式期における、いわゆる河童形土偶や中空円錐形土偶の型式学的検討にも取り組むことで、土偶装飾付土器・土偶付土器の出現期に対する認識の深化が期待できるが、これも実施できていない。

以上のような限界に対して取り組みを進め、今回の成果を改めて位置づけていくことで、土偶とその関連資料に対する認識は更に深まることが期待できる。本文中で細々とあげた諸課題と合わせ、上記の限界に取り組んでいくことが、筆者の今後の課題となる。

今後の展望としては、対象とする地域の拡大があげられる。北海道南部から北陸地方東部にかけても土偶が取りつく土器が存在し、研究の蓄積も進みつつある（成田2012・影浦2019）。これらの先行研究を参照しつつ、本稿で基盤としたような観点から検討を加えてみたい。この点については稿を改めて論じ直すことにする。

【謝辞】

本稿は第314回近江貝塚研究会（2019年12月14日（土）開催）での研究発表を土台とします。ご意見をくださった参加者にお礼申し上げます。また、別途ご教示くださった水ノ江和同氏・佐野隆氏・長田友也氏に感謝します。以上のご意見・ご教示を十分生かし切れていない点については再挑戦を期します。

註

(1) 大便を財・材に変えられるような力をもつ神がおり、その死

体を切り刻んで撒くと様々な種類の食料が生えてくるという神話で、世界各地に見られる食物起源神話の型式の一つである。

(2) 背面に示された段も上下を画するものであって、ここで想定した構造と実像を証左する上で重要だと考える（図2-(1)）。

(3) この観点に拠って立つならば、1. 序論の(3)節で投げかけた問いに対応可能になるだろう。女性原理を基盤としないので、乳房等の見られないものを無理なく説明できる。頭部や顔面の表現が曖昧な土偶はα態をとる依代として製作されたものだ。また、プレート状の顔面は取りつく〈甲〉であり、仮面土偶やハート形土偶をはじめとする類品は、〈甲〉が取りついていることを顕示した造形である。厳めしい土偶は厳めしい力をもつ霊的存在のインストールを写した像だと説明できよう。

(4) このような観点の起点は谷川磐雄らの見解（谷川1928）にあり、早くから提示されてきた捉え方の一つでもある。ただし、この観点に基づく見解は、資料に基づく明確な論証があまりなされてこなかった傾向にあり、その充実が課題だと考える。

(5) このような〈うつろ〉なる器とα態をとる〈乙〉の同一化が大きく進行する中で、I種を起源として顔面把手付土器（土器そのものに〈甲〉だけが取りつく形式）などの出現・増加基盤が形成された可能性もある。この点は改めて検討し直したい。

(6) β態を採用する土偶装飾付土器・土偶付土器の根本的性質をこのように位置づけられるなら、α態を採用するそれは、霊力のインストールを待つ（依代）としての役割をもつ器だということになる。

(7) 先学諸氏が指摘するように、土偶装飾付土器・土偶付土器の出土数が土偶に比べて極端に少ないなら、日常的にその霊力を利用するための道具というよりは、特別な機会に用いる祭器としてそれを位置づけるべきだろう。一方で、土偶文様が土器文様に溶解した段階4以降については、精査の結果、資料数が増加する可能性がある。また、段階4への移行期ないしその前後の時期から増加する顔面把手付土器も同様な構造と性質を持つ可能性がある。以上のことを勘案するなら、上記の位置づけは慎重に吟味し直す必要もある。この点は改めて問い直したい。

挿図典拠

図1 橿形町教育委員会1994、川合1988、茅野市教育委員会2003、藤森ほか1965、瀬口2015・2018、財団法人山形県埋蔵文化財センター1994から引用・筆者編集

図2 櫛原1997、茅野市教育委員会1990から引用・筆者編集

図3 橿形町教育委員会1994、茅野市教育委員会1990から引用・筆者編集

図4・9 櫛原1997から引用・筆者編集

図5～8 瀬口2015・2018より引用・一部改変

図10・11・14 櫛原1997より引用・一部改変

図12・14 新津2019、中村197より引用・改変・筆者トレース

図13 橿形町教育委員会1994、川合1988、櫛原1997、中村1979より引用・一部改変

図15 川合1988より引用・一部改変

図 17 筆者作成

文献（著者名・刊行機関名 50 音順、刊行年順）

- 大野雲外(1910)「土偶の形式分類に就いて」『東京人類学雑誌』
第 26 巻第 296 号
- 小野正文(1989)「土偶付土器について」『下総考古学』11
- 影浦 覚(2019)「北海道内における円筒土器文化期の顔を表現した土器について」『北海道考古学』第 55 輯
- 川合剛(1988)「名古屋市博物館所蔵の土偶関係資料」『研究紀要』
第 21 巻 名古屋市博物館
- 楡形町教育委員会(1994)『鋳物師屋遺跡』
- 楡原功一(1997)「土偶装飾付土器」について」『土偶研究の地平』4
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター(1994)『西ノ前遺跡』
- 佐原真・小林達雄(2001)『世界史のなかの縄文一対論』新書館
- 瀬口眞司(2013)「土偶とは何か——図像に残された意図から用途と役割を探る」『紀要』26 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司(2015)「初期土偶の根本的性質と展開過程」『古代文化』
67-3、公益財団法人古代学協会
- 瀬口眞司(2018)「前期土偶の根本的性質と展開過程」『紀要』31
財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司(2019)「土偶とは何か」『考古学講義』ちくま新書
- 谷川盤雄(1928)「土偶の社会学的考察」『國學院雑誌』第 32 巻 9 月号
- 茅野市教育委員会(1990)『棚畑』
- 茅野市教育委員会(2003)『中ッ原遺跡』
- 鳥居龍蔵(1922)「日本石器時代民衆の女神信仰」『人類学雑誌』
第 37 巻第 11 号
- 中村日出男(1979)「神奈川県大日野原遺跡出土の顔面把手付土器」
『考古学ジャーナル』166
- 成田滋彦(2012)「11：2005—なぜ富ノ沢（2）遺跡から土偶が大量に出土しなかったのか」『研究紀要』第 17 号 青森県埋蔵文化財センター
- 新津健(2019)「土偶付土器の実態と出現の背景」『縄文時代』30
- 藤沼邦彦(1997)『縄文の土偶』歴史発掘③ 講談社
- 藤森栄一ほか(1965)『井戸尻』中央公論美術出版
- 松室孝樹(2013)「発生期土偶に関する覚書」『紀要』26 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 山田猛(1999)「各部身体表現から見た土偶の性格」『研究紀要』
第 8 号 三重県埋蔵文化財センター

（せぐち しんじ：調査課 課長補佐）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.33 2020.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages